

## 2019～2020年の西郷林道周辺の鳥類相

柳町 邦光\*・村上 公輝\*\*・村上 千夏子\*\*

The bird fauna of around Seigou woody path in 2019-2020

Kunimitsu YANAGIMACHI\* and Kimiteru MURAKAMI\*\* and Chikako MURAKAMI\*\*

(要旨) 福井市西部に位置する丹生山地の北東端部に敷設されている西郷林道において、2019年秋季から2020年夏季の一年間に亘って、スポットセンサス法を用いて鳥類相を調査した。その結果、12目29科64種が確認され、その種構成は留鳥29種、夏鳥17種、冬鳥11種、旅鳥5種、漂鳥2種であった。その中に県域絶滅危惧種の12種が含まれていた。また秋季に46種、冬季に30種、春季に51種、夏季に39種が出現し、そのうち繁殖または繁殖の可能性が極めて高い種として31種が含まれていた。西郷林道周辺では、年間を通して多くの鳥類が生息し、春季には繁殖地として、渡りの時期には重要な休息地として利用している。今後も里山の自然環境を保全するために、継続的な調査が必要である。

キーワード：里山の鳥類相、西郷林道

### 1. はじめに

自然環境を保全するには、生物群集の構造や生物の生息環境を多角的に解析し、その結果を資料として残し、実際に応用していくことが重要である (Meffe & Carroll, 1994)。環境が類似していても、緯度・経度および経年変化やその他の環境条件によっても、そこに生息する鳥類相は異なる (由井, 1988)。これらを知ることは、種の生息条件の解明につながると期待されており、里地・里山や河川流域などで、鳥類群集を調査した事例が報告されている (藤巻, 1989, 柳町, 2017, 2019)。ある地点における鳥類相の調査データを蓄積し、その経年変化を明らかに出来れば、自然環境の変化を把握するための、有用な知見になることが期待される。

そこで、福井市西部の丹生山地の北東端に位置する西郷林道において、2019年9月から2020年8月までの一年間に亘って、スポットセンサス法による鳥類相調査を行ったので報告する。本報告が、今後の里地・里山の自然環境の保全を図っていく上での基礎資料となれば幸いである。

### 2. 調査地および調査方法

#### (1) 調査地の概要

調査地の西郷林道は、福井市街地と越前海岸の間に位置する国見岳 (標高656m) を中心とした、南北に連なった丹生山地の稜線上に敷設された林道であり、丹生山地のほぼ北東端に位置する。福井市田ノ谷町地係から入山し、その山稜に西郷林道の起点 (36.100N, 136.163E, 標高247m) があり、ここから約3.0kmの区間を調査区域とし、その稜線上に調査地点として約500mごとにA～G点の7地点 (図1-拡大図) を設定した。

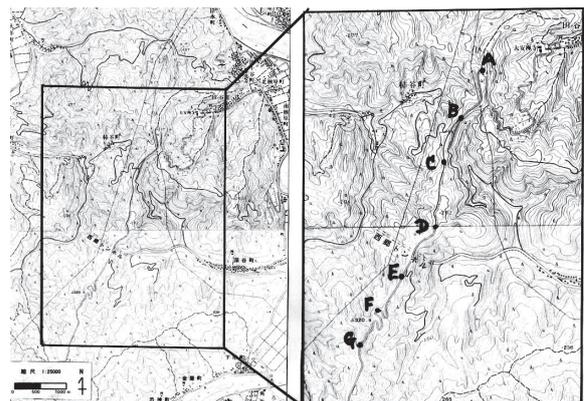


図1. 調査地点一拡大図

その調査地点周辺は、高木のクヌギ *Quercus acutissima* やコナラ *Q. serrata*、ホオノキ *Magnolia obovata*、カラスザンショウ *Fagaria ailanthoides*、アカマツ *Pinus*

\*〒918-8046 福井市運動公園1-2703

\*1-2703, Undo-koen, Fukui City, Fukui. 918-8046, Japan

\*\*〒910-0043 福井市四十谷町3-35-10

\*\*3-35-10, Shijutani-cho, Fukui City, Fukui. 910-0043, Japan

*densiflora*等の他、低木のリョウブ *Clethra barbinervis*、エゴノキ *Styrax japonica*等の落葉広葉樹林に混じって、モウソウチク *Phyllostachys pubescens*の群落が散在している。また植栽されたスギ *Cryptomeria japonica*、ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*の人工林がモザイク状に分布する二次林の林相を呈している。

これら各地点は、どの地点も類似した落葉樹林および杉・桧の針葉樹林との混交林であり、各地点の開空度と林道脇の草地の広さに多少の差はあるが、植生環境に大きな差異は無い（表1、図2）。

表1. 各地点の環境概略 (%)

地点	落葉樹林	針葉樹林	草地	道路	開空度
A	30	0	30	40	70
B	40	20	20	20	40
C	50	20	10	20	30
D	60	10	10	20	50
E	70	10	0	20	20
F	60	10	10	20	60
G	30	40	10	20	20



図2. C地点

## (2) 調査期間および方法

調査地の鳥類相をより精度高く把握するために、調査時期および日数に関して、年間20日間以上の日数が必要とする報告がある（大迫ほか、1996）。調査期間は、通年でなおおかつ日数を多くすることが望ましいが、天候不順や積雪、土砂崩れによる通行不能等で現実的には困難である。本調査では期間を一年間とし、例年は積雪のため冬期間の調査は不可能であるが、今冬の積雪は極端に少なく、冬期間の調査は可能であった。調査は、天候が晴天～曇天で風の無い穏やかな日を選び、ほぼ日の出時刻から約2時間かけて、各地点を順次移動しながら実施した。その実施回数は、毎週1回を基本とし合計54回実施したことに加えて、夏鳥が定着する5～6月には、定期的な調査日の夜明け前および平日に任意調査を行った。

調査方法は、10倍の双眼鏡および60倍のフィールドスコープを使用し、各地点において10分間で鳥類

の姿および鳴き声を観察するスポットセンサス法により実施した。各地点の調査範囲は、半径約50m以内（0.785ha）およびその上空域とし、7地点の延面積（5.5ha）で確認された鳥類について、その種名と個体数を記録した。またこれらの調査には筆者ら3人が、意思疎通を図りながら共に行動し、鳴き声の強弱や地鳴きによる種の同定、個体数の確認等において出現種の把握に努めた。しかし、上空を群れて移動する個体は、周囲の樹木による不十分な確認や重複カウントの可能性、および開放部では遠近感のズレ等で、範囲内外を正確には判断できないこともあった。更に、希に確認されるような種（例えばヤイロチョウ *Pitta brachyura*）や、鳴き声のよく通る種（例えばホトトギス *Cuculus poliocephalus*）などは、半径50mを超える範囲でも出現種として記録する傾向にあった。

## (3) 解析方法

本調査の鳥類相を解析するために、個体数および種数に加えて下記の指標を用いた。

### 【渡り区分】

出現種の渡り区分は、福井県福祉環境部自然保護課編（2001）に従った。ただし、この渡り区分は、県内全域を視野に入れているため、地域（嶺南、嶺北、奥越等）によって異なってくる。それ故に2項目に亘って表記されている種があり、これら一部の種については、本調査の結果に即して区分の変更を行った。一例として、ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*は「留鳥・漂鳥」とされているが、本調査では一年を通じて出現しているため「留鳥」と区分し、「#」印を付けて表記した（表2）。

### 【繁殖種】

本調査および調査区域周辺の里山で、過去に幼鳥が確認された種（例えば、コサメビタキ *Muscicapa latirostris*は2011年6月6日に近隣の羽坂林道で繁殖（柳町、未発表）、および4月～6月の長期に亘る囀りの確認により、繁殖の可能性が極めて高いと判断した種を「繁殖種」とした。

### 【夏鳥および旅鳥の初認日と生息期間】

夏鳥と旅鳥の初認日はその囀りの確認が主である。特に夏鳥の生息期間は繁殖期を過ぎれば、その確認は非常に困難である。9月頃までは希に囀りや姿が確認されることから、それまでの期間は生息していたものと判断した。旅鳥は春秋に確認されるが、本調査の秋季での確認は、前年度であり春季とのつながりは無い。

### 【個体数と種数の変動幅】

出現個体数および種数の月別変化を解析するため、当該月の最大値、最小値、平均値を算出し、その当該月の「最大値－最小値」の値を変動幅とした。

### 【県域絶滅危惧種】

福井県が選定した「福井県の絶滅のおそれのある野生動植物」には、鳥類129種がある（福井県安全環境部自然環境課編、2016）。本調査の出現種を県域絶滅ランク（絶滅、絶滅危惧Ⅰ、絶滅危惧Ⅱ、準絶滅、要注目、地域個体群（繁殖））に従って、夫々に区分した。ただし、ハイタカ*Accipiter nisus*、コマドリ*Luscinia akahige*、ルリビタキ*Tarsiger cyanurus*の3種は、地域個体群（繁殖）として選定されているが、繁殖期以外での出現であり、絶滅危惧種から除外した。

## 3. 結果および考察

### (1) 出現種の構成

本調査による出現種は、12日29科64種であった（表2）。これまでに福井県内で記録された鳥類は18日63科317種であり（福井県自然環境保全調査研究会鳥獣部会編、1998）、本調査ではその20.2%が出現したことになる。この内訳は、留鳥29種（45.3%）、夏鳥17種（26.6%）、冬鳥11種（17.2%）、旅鳥5種（7.8%）、漂鳥2種（3.1%）であった。このうち繁殖種は、留鳥18種、夏鳥13種となり、合計31種（48.4%）であった（表2）。

県域絶滅危惧種では、県域絶滅危惧Ⅰ類はヤイロチヨウの1種、県域絶滅危惧Ⅱ類はヨタカ*Caprimulgus indicus*、ハヤブサ*Falco peregrinus*の2種、県域準絶滅危惧はミサゴ*Pandion haliaetus*、ツミ*A. gularis*、サシバ*Butastur indicus*、アカシヨウビン*Halcyon coromanda*、オオアカゲラ*Dendrocopos leucotos*、コサメビタキの6種、要注目はサンシヨウクイ*Pericrocotus divaricatus*、サンコウチヨウ*Terpsiphone atrocaudata*、ヤブサメ*Cettia squameiceps*の3種となり、合計12種（18.8%）が出現した。

### (2) 個体数および種数の月別変化

本調査における年間の総出現個体数は7,313羽であった。その上位10種は（表2-右端）、ヒヨドリ(1,235羽)が最も多く、次いでアトリ*Fringilla montifringilla*、メジロ*Zosterops japonica*、マヒワ*Carduelis spinus*、ヤマガラ*Parus varius*、シジュウカラ*P.minor*、カワラヒワ*Chloris sinica*、キジバト*Streptopelia orientalis*、イカル*Eophona personata*、カケス*Garrulus glandarius*となり、これらは留鳥8種、冬鳥2種であって、この10種の合計は5,290羽（72.3%）であった。

各月の出現個体数の平均値では、4月（207羽）と12月（185羽）に大きなピークを示し、9月（97羽）と2月（109羽）は低くなった（図3）。個体数の変化では、繁殖期と渡り時期の秋季から初冬に多くなり、餌の少ない厳冬期には少なくなる傾向が見られた。また、繁殖期が

終わり渡り時期が始まる直前までの夏季には最も少なくなった。各月の変動幅では、12月（251羽）が最大に、11月（26羽）が最小となった（図3）。この冬季の変動要因は、アトリとマヒワの大群の増減によるものと考えられる。

種数の各月の平均値では、4月（23.5種）が最大となり、繁殖期の5月～6月へと続き、11月（20.2種）が第2のピークとなった（図4）。この傾向は、春季および秋季には夏鳥や旅鳥、冬鳥などの渡り鳥が確認されたことによるものと推測される。夏季には個体数の減少とともに種数も最小となった。また、変動幅も4月（14種）を最大に、次いで12月および6月となり、いずれも春秋の渡り時期によるものと推測される。

出現種ごとの個体数を春夏秋冬の季節別に分類した（表3）。秋季（1,981羽）と春季（2,304羽）には増大し、冬季（1,699羽）と夏季（1,329羽）には減少する傾向にあった。この増減の傾向は、近隣の日野川流域や足羽川流域等では、冬季に最大となる傾向（柳町、2018、2019）とは異なり、その生息環境の相違によるものと考えられる。

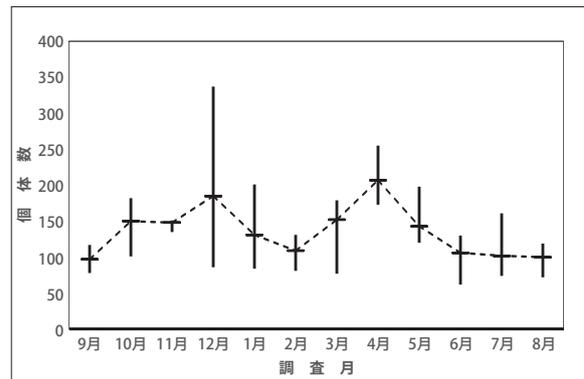


図3. 個体数の月別変化

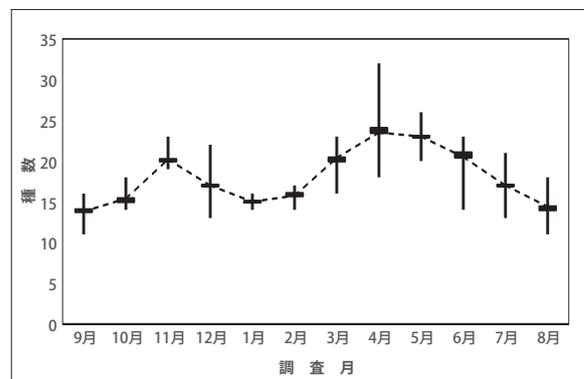


図4. 種数の月別変化

表2. 出現種および月別出現個体数

目名 Order	科名 Family	種名 Species	学名 Scientific Name	繁殖	渡り 区分	2019												総計 54回	順位	
						9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月			
						5回	5回	5回	4回	4回	4回	5回	4回	5回	4回	4回	5回			
キジ	キジ	ヤマドリ	<i>Phasianus soemmerringii</i>	*	留	1	1	1		1		4				1	3	12		
カモ	カモ	カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha</i>		#留												5	5		
ハト	ハト	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	*	留	44	46	25	7	1	8	10	21	45	22	12	44	285	8	
		アオバト	<i>Sphenurus sieboidii</i>		漂		13	16		1			1	3	1			35		
ペリカン	サギ	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>		留							1		1	1			3		
		ダイサギ	<i>Egretta alba</i>		#留													1	1	
カッコウ	カッコウ	ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	*	夏									8	6	10	1	25		
		ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>	*	夏								1	22	9	1		33		
ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	*	夏									6	3			9		
アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>		#旅	7												7		
タカ	ミサゴ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>		#留	1									2			3		
	タカ	トビ	<i>Milvus migrans</i>	*	留	1				3	6	14	5			3		32		
		ツミ	<i>Accipiter gularis</i>		留		2											4		
		ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>		留		1	2	1									4		
		サシバ	<i>Butastur indicus</i>	*	夏	1	5											6		
ブッポウソウ	カワセミ	アカシヨウビン	<i>Halcyon coromanda</i>	*	夏									7	13	3		23		
キツツキ	キツツキ	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	*	留	16	16	8	17	7	8	14	11	15	25	15	11	163	11	
		オオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos</i>		留		1											1		
		アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>		留	9	7	3		2	1	1	1					24		
		アオゲラ	<i>Picus avokera</i>	*	留	3	3					13	15	12	6	8	14	74		
ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>		#留					1	1							2		
スズメ	ヤイロチョウ	ヤイロチョウ	<i>Pitta brachyura</i>		夏									1	1			2		
	サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	*	夏	4								5	35	23	38	130	13	
	カササギヒタキ	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>	*	夏										2	2	1	6		
	カラス	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	*	留	32	92	28	6	6	16	16	12	15	4	7	7	241	10	
		ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	*	留	3	2	2	6	3	5	17	17	4	5			64		
		ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>		留			7	3	3	6	17	10				1	47		
		クワイタダキ	<i>Regulus regulus</i>		冬			19	2			1						22		
		シジュウカラ	<i>Parus varius</i>	*	留	62	49	43	10	17	21	45	57	33	22	13	40	412	5	
		ヒガラ	<i>Parus ater</i>	*	留		1	18	8	8	8	27	23	4		1		98		
		シジュウカラ	<i>Parus minor</i>	*	留	13	16	27	12	38	18	46	30	34	19	24	22	299	6	
	ツバメ	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>		夏	11								2	10	6	21	50		
		イワツバメ	<i>Delichon urbica</i>		夏											3		3		
	ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	*	#留	157	201	123	75	57	29	38	54	231	89	95	86	1,235	1	
	ウグイス	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	*	#留	2	19	19	5	2	1	17	26	15	14	17	16	153	12	
		ヤブサメ	<i>Cettia squameiceps</i>	*	夏								1	2	5	3		11		
	エナガ	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	*	留		7	13	15	10	14	12	8	12	13		20	124	14	
	ムシクイ	オオムシクイ	<i>Phylloscopus examinandus</i>		旅										2			2		
		メボソムシクイ	<i>Phylloscopus xanthodryas</i>		#旅										4			4		
		エゾムシクイ	<i>Phylloscopus borealoides</i>		#旅	1								1	3			5		
		センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	*	夏										2	1		3		
	メジロ	メジロ	<i>Zosterops japonica</i>	*	#漂	82	78	28				10	120	81	61	84	134	678	3	
	ミソサザイ	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>		#留			2	4	5	6	3						20		
	ヒタキ	トラツグミ	<i>Zoothera dauma</i>	*	留							4	4	14	3			25		
		クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	*	夏								13	25	20	27	4	89		
		シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>		冬		14	3	2	1	1	3						24		
		ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>		冬		14	39	8		1	1	1					64		
		コマドリ	<i>Luscinia akahige</i>		#旅									1				1		
		ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>		#冬		1	18	18	14	5	9	2					67		
		エゾビタキ	<i>Muscicapa griseisticta</i>		旅	3												3		
		コサメビタキ	<i>Muscicapa latirostris</i>	*	#夏	16											1	4	21	
		キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	*	夏	1								22	9	6	1	39		
		オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	*	夏	1							1	1	1		3	7		
	セキレイ	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>		#留	3	4											7		
	アトリ	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>		冬		125	121	321	231	72	108	216					1,194	2	
		カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>	*	#留		10	89	38	35	31	22	19	15	5	20	10	294	7	
		マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>		#冬			8	94	50	148	216	108	3				627	4	
		ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>		冬			1				1						2		
		ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>		#冬			31	16	11	14	19	13					104	15	
		シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>		冬			8	7			1	2	1				19		
		イカル	<i>Eophona personata</i>	*	#留	13	22	31	63	17	9	17	21	24	17	5	23	262	9	
	ホオジロ	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	*	#留		2	2				3	18	4	5	2	9	5	50	
		カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>		冬			5				5	42					52		
		アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>		#冬			2										2		
						個体数	487	752	742	738	524	437	762	828	714	424	406	499	7,313	
						種数	25	27	31	23	24	25	29	35	38	34	23	25	64	
日本鳥学会		日本鳥類目録 第7版 準拠		「*」は繁殖種		「渡り区分」の「#」は区分変更による種		1地点の面積 = (半径50m) 7,850㎡				7地点の面積 = 5.53ha								

2019～2020年の西郷林道周辺の鳥類相

表3. 季節別および地点別個体数

種名 / 地点	季節				地点別							総計
	秋季 15回	冬季 12回	春季 14回	夏季 13回	A	B	C	D	E	F	G	
ヤマドリ	3	1	4	4	1	1	1	2	1	2	2	12
カルガモ				5				5				5
キジバト	115	16	76	78	22	49	56	62	32	32	32	285
アオバト	29	1	4	1	1	13	8	11	2			35
アオサギ			2	1			2		1			3
ダイサギ				1				1				1
ホトトギス			8	17		4		6	8	6	1	25
ツツドリ			23	10	4	2	4	4	7	8	4	33
ヨタカ			6	3	2	3	1	2		1		9
アマツバメ	7							3	2	2		7
ミサゴ	1		2		2	1						3
トビ	1	9	19	3	10	5	4	3	3	7		32
ツミ	2			2				1		3		4
ハイタカ	3	1				2		1			1	4
サシバ	6									6		6
アカショウビン			7	16	4	5	3	1	4	5	1	23
コゲラ	40	32	40	51	39	28	13	16	23	21	23	163
オオアカゲラ	1									1		1
アカゲラ	19	3	2		7	1	2	1	4	5	4	24
アオゲラ	6		40	28	10	8	12	8	18	12	6	74
ハヤブサ		2				1	1					2
ヤイロチョウ			1	1		2						2
サンショウクイ	4		40	86	20	37	10	5	16	27	15	130
サンコウチョウ			2	4	1	2	1	1			1	6
カケス	152	28	43	18	28	41	33	25	24	60	30	241
ハシボソガラス	7	14	38	5	27	19	9	2	2	3	2	64
ハシブトガラス	7	12	27	1	21	18	2	3	3			47
クイタダキ	19	2	1		2	7	1		1	3	8	22
ヤマガラ	154	48	135	75	86	54	34	44	44	66	84	412
ヒガラ	19	24	54	1	6	13	9	17	3	26	24	98
シジュウカラ	56	68	110	65	30	87	20	27	39	42	54	299
ツバメ	11		2	37	9	10	2	14	1	6	8	50
イワツバメ				3							3	3
ヒヨドリ	481	161	323	270	146	256	151	169	96	291	126	1,235
ウグイス	40	8	58	47	12	19	14	27	25	39	17	153
ヤブサメ			3	8	3	3		2	1		2	11
エナガ	20	39	32	33	7	7	30	13	5	47	15	124
オオムシクイ			2				1				1	2
メボソムシクイ			4				2			2		4
エゾムシクイ	1		4				2		1	1	1	5
センダイムシクイ			2	1		1	1			1		3
メジロ	188		211	279	95	139	77	102	64	130	71	678
ミソサザイ	2	15	3		4	12	1	1			2	20
トラツグミ			22	3	2	4	3	5	2	7	2	25
クロツグミ			38	51	16	19	8	5	15	16	10	89
シロハラ	17	4	3		5	7		1	5	2	4	24
ツグミ	53	9	2		10	12	12	10	1	18	1	64
コマドリ			1						1			1
ルリビタキ	19	37	11		4	13	4	11	3	13	19	67
エゾビタキ	3					1	2					3
コサメビタキ	16			5	2	1	4	1	1	9	3	21
キビタキ	1		22	16	4	9	3	9	5	5	4	39
オオルリ	1		2	4		1		1	1	3	1	7
キセキレイ	7				3	2	1	1				7
アトリ	246	624	324		66	485	134	246	69	99	95	1,194
カワラヒワ	99	104	56	35	50	102	39	46	25	23	9	294
マヒワ	8	292	327		83	98	57	75	11	184	119	627
ベニマシコ	1		1				1	1				2
ウソ	31	41	32		17	9	33	2	9	22	12	104
シメ	8	7	4		3	10	1	4		1		19
イカル	66	89	62	45	29	63	28	33	21	66	22	262
ホオジロ	4	3	27	16	5	7	11	14	5	5	3	50
カシラダカ	5	5	42		10	37		5				52
アオジ	2				1	1						2
総個体数	1,981	1,699	2,304	1,329	910	1,722	847	1,048	603	1,324	842	7,313
種数	46	30	51	39	44	51	47	49	42	44	41	64

### (3) 留鳥の月別変化

通年で出現個体数の多い5種は、多い順にヒヨドリ、メジロ、ヤマガラ、シジュウカラ、カワラヒワであった。ヒヨドリは10月(201羽)および5月(231羽)の渡り時期に大きなピークを示し、2月(29羽)～3月(38羽)には減少した(図5)。この結果から、ヒヨドリは留鳥でありながら漂鳥性の高い種であることが示唆された。次いで高かったメジロは、8月(134羽)と4月(120羽)にピークを示したが、11月(28羽)から減少し12月～2月の冬季には全く出現せず、3月(10羽)から増加に転じた(図5)。メジロは冬季の里山では、餌不足のため里地へ移動したものと推測される。この明確な移動により、里地では「留鳥」とされ、里山では「漂鳥」となる新しい知見となった。ヤマガラ、シジュウカラ、カワラヒワは、春秋の変化を伴いながらの出現であったが、ヒヨドリやメジロほどの大きな変動はなかった。

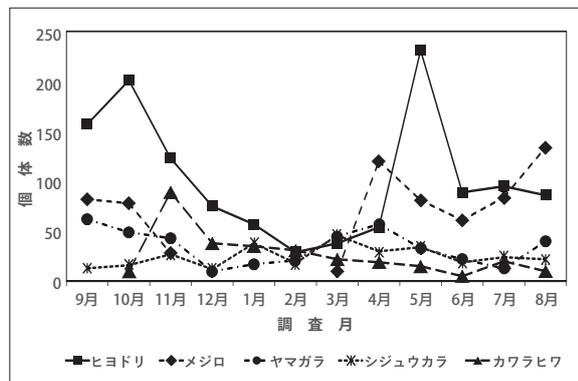


図5. 留鳥の月別変化

### (4) 冬鳥の月別変化

冬鳥の出現個体数では、多い順にアトリ、マヒワ、ウソ *Pyrrhula pyrrhula*、ルリビタキであった。特にアトリは12月の大群(321羽)により、マヒワは3月の大群(216羽)によって、それぞれの当該月の個体数に大きな変動幅をもたらす要因となった(図6)。ウソは10月の出現はなかったが、11月～4月まで20羽前後が安定的に出現した。またルリビタキ、ツグミ *Turdus naumanni*、シロハラ *T. pallidus*も安定的に出現した。しかし、本年は積雪が少なかったが、例年は積雪が多くなると、多くの鳥類は積雪の少ない里地や河川流域へ移動することから、本調査地のような里山では、その個体数および種数ともに大きく減少することが予想される。

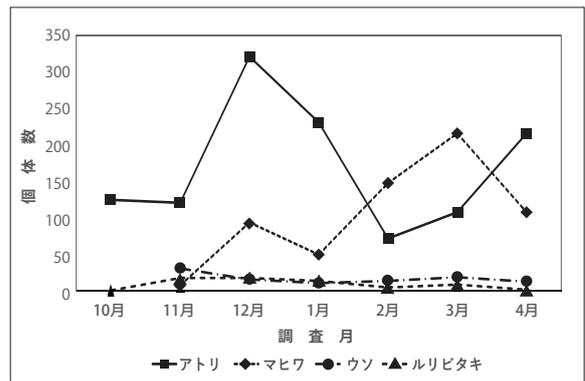


図6. 冬鳥の月別変化

### (5) 夏鳥および旅鳥の初認日と出現期間

この調査区域で繁殖種となりうる主な夏鳥は、クロツグミ *T. cardis*が最も早く渡来し、4月中旬から8月上旬まで囀りが継続的に確認された。次いでサンショウクイも4月下旬に渡来し8月下旬まで、囀りと飛翔が継続的に確認された。オオルリ *Cyanoptila cyanomelana*、ツツドリ *C. saturatus*、ヤブサメは4月下旬に渡来し7月中旬ごろまで出現した。キビタキ *Ficedula narcissina*は5月初旬に、サンコウチョウ、アカショウビン、ホトトギス等が5月中～下旬に次々と渡来し、ほぼ継続的に7月下旬ごろまで出現した(図7)。センダイムシクイ *Phylloscopus coronatus*は、5月上旬に2回と6月上旬の1回だけの出現となり、旅鳥としての可能性が高い種と考えられる。コサメビタキの初認は7月中旬で、8月上・下旬の3回、および9月上～中旬には渡りと思われる16回の出現であることから、旅鳥の可能性が高いと考えられる。

旅鳥の出現回数は少なく、エゾムシクイ *P. borealoides*は4月25日および5月2日と9日の3回となり、秋季は9月28日のみであった。メボソムシクイ *P. xanthodryas*は5月17日と30日の2回であり、オオムシクイ *P. examinandus*とコマドリはそれぞれ1回だけであった。またエゾビタキ *M. griseisticta*は9月14日、28日の2回だけで、春季の出現はなかった(図7)。夏鳥および旅鳥の初認日確認の精度を高めるには、その生息環境を考慮した調査地の選定と、回数を増やすことが重要と考えられる。

### (6) 各調査地点の出現個体数

B地点(1,722羽)では最も多く、E地点(603羽)と最も少ない出現だった(表3)。各地点の植生環境に大きな差は無いものの、開空度の違いによりアトリ、マヒワ、ヒヨドリ等の、大群で移動する種の確認状況による差とも考えられる。種数ではB地点(51種)が最も多く、G地点(41種)で最も少なかったが、各地点が稜線にあり、その標高がほぼ同じであり、各地点の出現種にも大きな違いは無かった。

種名	2019年		2020年							
	9月		4月	5月	6月	7月	8月			
<b>夏鳥</b>										
クロツグミ			11							1
オオルリ	7		25			27				29
サンショウクイ	1		25							29
ツツドリ			25				5			
ヤブサメ			25					12		
センダイムシクイ				2, 9		7				
キビタキ	7			2				17		29
サンコウチョウ				17			5			1
アカショウビン					23			24		
ホトトギス					23					1
コサメビタキ	7, 14							17	8	29
<b>旅鳥</b>										
エゾムシクイ		28	25	2, 9						
メボソムシクイ					17, 30					
オオムシクイ					30					
コマドリ			25							
エゾビタキ	14, 28									

図7. 夏鳥および旅鳥の初認日と出現期間

#### 4. 任意調査の必要性

県域絶滅危惧種のヤイロチョウとヨタカは、本調査を補完するための任意調査で出現した。ヤイロチョウは2016年5月下旬頃より、本調査区域のA地点付近で確認されており（日本野鳥の会福井県，2016，図8），ヨタカも2016年6月中旬にA～G地点付近，および2019年6月10日にはC地点付近でその姿が確認された（図9）。本調査でも任意調査の夜間，および2020年8月23日に姿が確認されており（村上，未発表），このような鳥類相の調査では，日常的な観察も必要であり，その折りに得た情報を本調査でも確認するために，定期調査に加えて任意調査が必要であると考えられる。



図8. ヤイロチョウ（2016年5月下旬撮影）

#### 5. おわりに

市街地近郊の里山では，年間を通して多くの鳥類が生息し，特に晩秋および春季には多くの種との出会いも期待できる。里山は四季を通じてその生物多様性を発揮する重要な場所であるが，積雪のある北陸地方では，冬季には里地や河川流域において，気軽に自然とふれあえる身近な場所として，心の癒しに活用して頂きたい。このような身近な里地・里山では，自然および人為的な過度の環境変化による影響を最小限にするため，今後の定期的な調査を通して，自然環境の保全に繋げていければ幸いである。

今調査の実施および報告書の作成にあたり，福井市自然史博物館学芸員である出口翔大博士には，丁寧なご指導を頂き，ここに名を記して感謝申し上げます。



図9. ヨタカ（2019年6月中旬撮影）

## 引用文献

- 藤巻裕造, 1989, 北海道十勝地方の鳥類V十勝下流沿いの鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 21 (1), 76-83.
- 福井県自然環境保全調査研究会鳥獣部会編,1998,福井の鳥とけものたち. 福井県, 222p.
- 福井県福祉環境部自然保護課編, 2001, 第55回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌「鳥たちの四季」. 福井県, 183p.
- 福井県安全環境部自然環境課編,2016,改訂版福井県の絶滅のおそれのある野生動植物. 福井県, 536p.
- 真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014, 日本の野鳥 650, 2014, 平凡社, 788p.
- Meffe,G.K. and Carroll,C.R, 1994, Principles of conservation biology. Sinauer Associates,Sunderland. 600p.
- 中村登流・中村雅彦, 1995, 原色日本野鳥生態図鑑 (陸鳥編). 保育社, 80p.
- 日本鳥学会編, 2012, 日本鳥類目録 改訂第7版. 438p.
- 日本野鳥の会福井県, 2016, 会報つぐみ, (No179), 10-11
- 大迫義人・納村力・多田雅充, 1996, 福井県の丘陵地における鳥類相の効率的な調査日数と調査時期. Ciconia, (5), 39-54.
- 高野伸二, 2015, フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂新版. (財)日本野鳥の会, 392p.
- 柳町邦光, 2017, 羽坂林道周辺における鳥類相. 福井市自然史博物館研究報告, (64), 37-48.
- 柳町邦光, 2018, 日野川下流域における鳥類相. 福井市自然史博物館研究報告, (65), 35-46
- 柳町邦光, 2019, 足羽川中流域における鳥類相. 福井市自然史博物館研究報告, (66), 33-44.
- 由井正敏, 1988, 森に棲む野鳥の生態学. 創文, 237p.

## The bird fauna of around Seigou woody path in 2019-2020

Kunimitsu YANAGIMACHI and Kimiteru MURAKAMI and Chikako MURAKAMI

### Abstract

A bird fauna of Seigou woody path on Niyhu mountain ridge was surveyed throughout a year from September 2019 to August 2020 by using the spot census method. This study area is located on the western suburbs in Fukui City.

As the result, a total of 64 species belongs to 29 families of 12 orders were recorded. 29 resident species, 17 summer visitor species, 11 winter visitor species, 5 migratory species and 2 drift species were contained in these species. It includes 12 endangered species which were registered in the Red-Data-Book of Fukui Prefecture in 2016. 46 species, 30 species, 51 species, 39 species were recorded in autumn, winter, spring and summer season respectively. 31 species of them seemed to be breeding around this study area with high possibility.

Many birds inhabited around Seigou woody path throughout the year and many seasonable birds make use of this area as good their breeding spot and stop-over site for migration in spring and autumn season. Therefore, it is important to study the bird fauna for preserving these

country mountain, we must keep on monitoring this area in the future.

### Key Words

Bird fauna of country mountain, Seigou woody path